

《資料紹介》 鄭元觀筆 虎之図

上江洲安亭¹

I. はじめに

沖縄美ら島財団収蔵品から鄭元觀筆の虎之図(収蔵番号 271)を紹介する。鄭元觀は、久米村士族で、近世琉球期に書家として最も有名である鄭嘉訓の長男である。父だけでなく、鄭元觀も書家として優れていた。首里王府の進貢貿易を担っていた久米村出身であるが、絵画作品も残している。鄭家訓も水墨画で竹之図を残している²が、鄭元觀の場合は、彩色された虎之図を描いている。本稿では、書家鄭元觀が残した絵画作品の特徴について触れることとする。

II. 鄭元觀の履歴

『鄭氏家譜』によると³、鄭元觀は、鄭家訓の長男で、中国に渡航歴が 4 回。鹿兒島の滞在歴も 1 回ある。1817 年の鹿兒島滞在時は、太守公の命により、しばしば書を認め上覧に備えたとある。この時の太守(薩摩藩主)は、島津斉興である。また、進貢貿易による渡航の間に琉球使節の江戸参府(江戸上り)や、鹿兒島に派遣される楽童子に書の指導等も行った履歴が残っている。

晩年は、島津家からの要請があったと思われるが、絵に賛詩文を書いて奉呈した褒美として花瓶・丁香風

鄭元觀の略歴

乾隆 54 年 (1789)	誕生
嘉慶 20 年 (1815)	読書習禮のため福州に派遣
嘉慶 2 年 (1817)	帰国時に風不順により鹿兒島漂着。 島津斉興の命により、書を認め上覧に備える。
道光 13 年 (1833)	接貢船存留通事となる。
道光 20 年 (1840)	楽童子幸地里主の筆法教授の師となる。
道光 23 年 (1843)	楽童子佐久眞里主の筆法教授の師となる。 島津斉興より提重を賜る。
道光 24 年 (1844)	進貢二号船通事となる。
道光 28 年 (1848)	進貢のため正義大夫(進貢使節の副官)
咸豐元年 (1851)	8 月に逝去。
咸豐元年 (1851)	画に賛詩文を書いて奉呈した褒美として花瓶・丁香風炉を賜う。

炉を賜っている(褒美は鄭元觀の死後、下賜されている)。家譜には、書に関する功績

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 首里城公園管理センター 首里城事業課 副参事(博士(芸術学))

² 『平成 26 年度沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展 久米村崇聖会創立 100 周年記念 久米村一琉球と中国の架け橋一』(沖縄県立博物館・美術館 2015 年 9 月) p31

³ 『那覇市史』資料編第一巻六家譜資料二久米系上(那覇市市史編集室 1980 年 3 月) p 629-631

について履歴が残っているが、絵師に任職した履歴は残っていない。
それでも鄭元観筆の絵画として現存しているのが本作品である。

Ⅲ. 作品の特徴

虎之図（収蔵番号 271）の基本情報

作者：古波蔵親方（1789-1851） 唐名：鄭元観 童名：宏橋

製作年代：19 世紀

形態：紙本著色 軸装 本紙縦 86.3 cm 横 44.7 cm

関防印：敬徳堂（朱文印） 落款：鄭元観印（白文印） 長光（朱文印）

関防印は「敬徳堂」（写真 2）で父の鄭家訓、鄭元観も含めて鄭氏で使用される堂号が使われている⁴。署名は無く、落款は白文印で「鄭元観印」、朱文印で「長光」とある（写真 3）。本作品は、過年度に保存修理を行っており、その時に料紙に関する分析調査を行った。使用していた植物繊維は青檀であるとの調査結果であった（写真 4）。清朝期に中国で生産された料紙によく使用される繊維であり、絵画や書跡作品の使用事例も多い。輸入した高級紙を使って絵画作品を描いたものと思われる。

描写の特徴としては（写真 1）、画面右下から伸びる岩石を虎が抱くような構図となっている。虎は白い眉が強調された描写であり、体毛の筆致も精緻である。虎の筆致は首里王府の貝摺奉行所に所属する絵師の作品と類似するが、岩石に巻き付いて抱くような構図は本作品の特徴といえる。

鄭元観の略歴にあるとおり、貝摺奉行所の絵師に任職した履歴は無い。しかし作品自体は、絵師に任職した者の作品とも遜色はない。鄭元観が進貢貿易のスタッフを行いながら、どこで絵画製作の技術を習得したのか不明である。

職業絵師としての作品ではないことから、琉球士族の文人画の一つと位置付けてもよいのではないだろうか⁵。今後の研究課題である。

⁴ 上江洲敏夫「研究ノート 堂号について」（『沖縄県立博物館紀要』第 12 号 沖縄県立博物館 1986 年 3 月）p19-24

⁵ 上江洲安亨「琉球士族の文化に関する一考察」（『第十九回中琉歴史関係国際学術会議』予稿集 2024 年 11 月）



写真 1 鄭元觀筆 虎之图(收藏番号 271)



写真2 関防印
朱文印で「敬徳堂」



写真3 落款
白文印で「鄭元觀印」
朱文印で「長光」



写真4 修理時に調査した料紙の顕微鏡画像

料紙に使用している植物繊維は青檀（せいだん）であった。